

## 【Session 2-1】

李 京燁

## 「韓国西海岸における送船の種類とその意味化の過程」

野村 伸一

## 1 身体表現からみた祭祀儀礼

本論文は五章から成る。著者は第一章で船送りは朝鮮半島の西海岸以外の地域、「済州島、南海岸、…日本や台湾…東南アジア」にもあるとするが、論文の中心は全羅道を対象とした第三章と第四章にある。第三章では船送りの分布と類型が述べられる。第四章では船送りを龍王祭のなかに置き、その意味を追究する。以下では、まず、この両章の眼目を確認する。そして、そののちに「東シナ海地域の船送り」という視点で若干の補足をした。

朝鮮半島西海岸一帯では祭儀の末尾に船送りをする。それは黄海道から忠清道、全羅道、さらに済州島にまでみられる。その際、全羅道では船に案山子が乗せられ、ひとつの特徴をなす。また、船を単独で流すこともあれば、競漕の形式で送りもする。競漕形式は現存の事例は少ないものの、過去にはかなり多かっただろうと李京燁氏はいう（以上、第三章）。

第四章では龍王祭の直後に船送りがあることに着目する。黒山島深里では水死者をユワンさまとよぶ。その祭祀がユワン祭である。ユワンは「凶漁や災難の原因となる」と同時に、村に魚をもたらすとみられている。それで供物を供え格別にまつ。李京燁氏は龍王とユワンは別のものとみる。一方、船上の案山子は村落のあらゆる災厄を負うと同時に、豊漁をもたらすことも期待される。豊漁将来への期待は嶋島の「妖怪の火」にみられる。嶋島の船主たちは、年初、案山子を乗せた船を送り出したあと、夜間、小高いところに登って沖をながめる。するとトッケビらがその船の上で火を焚いて遊ぶのがみられるという。後日、その位置に網を置くと大漁となるという。

## 2 周辺地域の龍王・水中孤魂の祭祀儀礼と船一対照研究のために

李京燁論文で興味深いのは水死者の祭祀ユワン祭である。水死者は丁重にまつられる。そして案山子とともに船が流される。ユワンや案山子には黒山島漁民の独特の心意一恐れと期待が込められる。この指摘はそのとおりであろう。同時に、それがいかにして表現されたのか、またユワンと龍王は別のものなのか、さらにユワンと案山子とはいかなる関係にあるのか、これらの点の究明が若干、足りない。以下、これについて補足したい。

実は黒山島のユワン祭を含む龍王祭は伝承が絶えた。そのため、船送りに至る詳細はもはや確認できない。ただし、調査記録がある。それによると、黒山島水里の漁民たちは案山子を龍王とよぶ。船送りの直前、龍王は親しみを込めてよびかけられる。時には冗談も浴びせられる。音楽があり、漁民の踊りがある（崔徳源『多島海日堂祭』1984年）。ここには、龍王、案山子、水死者の靈魂、水辺の妖怪、漁の吉凶を巡る一連の問題を解く手がかりがある。わたしは次のように考える。

龍王と水死者の靈魂の祭祀は一体のもので切り離せない。済州島で龍王迎えといえ、水死者の霊を迎える祭儀と豊漁祈願の祭儀のふたつを含む。東海岸の龍王クツでも水死者の霊と龍王を連続して迎えまつ。従ってヨン（ヨ）ワンとユワンの根源は同じものとみられる<sup>1</sup>。それは原初の海神に遡る。この

神は人を呑み込み、水死者の霊を支配する存在である。これがのちに官僚制にならって分化し、龍王、海辺の妖怪、水中孤魂のように表現された。しかし、多くの海民にとって現実の海神は未分化のままであった。古来知られている蛟龍などもそのひとつである。いずれにしても、龍王や水中孤魂の間に本質的な違いはない。

そこで、船に置かれる案山子<sup>ホスアビ</sup>を龍王<sup>ヨンワン</sup>とよんで、祈ったり、親しくよびかけたりもする（水里）。これは龍王<sup>ヨンワン</sup>のもとにいる水死者の諸霊および水中の妖怪へのよびかけであり、その顕現したものが案山子<sup>ホスアビ</sup>だとおもわれる。濟州島の死者霊迎えの龍王<sup>ヨンワン</sup>迎え（撫魂<sup>ムホン</sup>クツ）では、藁のヒトガタが造られる。同様のヒトガタは中国舟山列島の潮魂<sup>チヤオワン</sup>でもみられる。案山子類は元来ヒトガタであり、それへの祭祀が恒例化するとともに身近なものとなったのであろう。

水辺あるいは海上に火がみえる（蝸島ほか）。これは龍王のもとに逝った死者霊の顕現とみられる。蝸島の伝承は典型だが、五島列島の宇久島<sup>こうのうら</sup>神浦でも大晦日から年初、海上に「龍宮さまの火」（龍灯）がみえた。海民のあいだではこれが龍宮と直結していた。

東シナ海地域の船は単なる人の移動手段ではなかった。海神、龍王、その配下の妖怪（瘟神、人の死後の鬼神）、死者霊もまた船により来往した。伊平屋島や古宇利島<sup>ウシヤミ</sup>の海神祭では神女らが縄で船の輪郭を象り神来臨を表現する。神送りの際の船はみえないが、神女らは当然、船を見送っている。濟州島では痘神送りの船もあった。またトッケビの一種令監<sup>ヨンガム</sup>の伝承に基づく船送りもある。朝鮮半島西岸の龍王祭、東海岸の龍王<sup>トンヘアン</sup>クツでは水中死者霊をまずまつる。そして龍船も曳かれる。また、福建、台湾では瘟神王爺<sup>オンヤ</sup>の船がやがて天（玉皇）の使いとされ、地域守護、豊漁の神として迎え、送られる。船送りはまた巫覡、僧、道士の儀礼にも取れ込まれた（龍船、般若船）。船送りに伴う身体表現の諸相を知るには個々の図像、映像が必要である。以上は、その一部の紹介である。

## 註

1 — 濟州島巫俗の研究者文武秉<sup>ムン・ムビョン</sup>氏によると、「濟州島の人びとにとって‘요왕 龍王’ [ヨワン] は‘유왕’ [ユファン] または‘유왕’ [ユワン] ともいうのだが」、それは龍宮や龍王あるいは龍神の意味というよりは「海」または「海田」を意味するのだという（文武秉『제주도 본향당 本郷

堂 신앙과 본풀이』、民俗苑、2008年、332頁）。[ ]は野村伸一。これをみると、濟州島周辺ではヨワンもユワンも同じであり、それは文字を知る者たちが考える、いかめしい神格というよりは民俗化した海の神、あるいは海そのものだったことがわかる。